

関連イベント

館長美術講座

「ひらけ美術館—絵馬は絵なのか馬なのか」

4月25日(土) 14:00-15:30

会場：当館講堂 *申込不要 先着250名まで

※手話通訳あり

講演会「作品の“居場所”をあれこれ考える

5月9日(土) 14:00-15:00

会場：当館講堂 *申込不要 先着250名まで

講師：丹尾安典氏(早稲田大学名誉教授)

講演会「最新デジタル技術で迫る伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》

5月17日(日) 14:00-15:30

会場：当館講堂 *申込不要 先着250名まで

講師：木下悠氏(TOPPAN文化事業推進本部) 聞き手：薄田大輔(当館学芸員)

対談「風化をめぐる」

6月14日(日) 14:00-15:30

会場：当館講堂 *申込不要 先着250名まで

講師：鈴木久雄氏(彫刻家)×木下直之(当館館長)

ワークショップ「美術館をひらく」

5月16日(土) 13:00-16:00

講師：鈴木康広氏(アーティスト) 会場：当館エントランスホール

次回展覧会

「NHK日曜美術館 50年展」

7月18日(土) - 9月27日(日)

【チケット販売所】 前売り券は2026年4月24日(金)まで販売

【前売・当日券】 静岡県立美術館、チケットぴあ【Pコード：687-369】、セブンチケット【セブンコード：113-551】(セブンイレブン)、

ローソンチケット【Lコード：46450】(ローソン、ミニストップ)

【前売券のみ】 大和文庫、戸田書店(江尻台店)、静岡市美術館ミュージアムショップ

交通案内

JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分

JR「静岡駅」南口からタクシーで約20分、または北口から静鉄バスで約30分

JR「東静岡駅」南口からタクシーで約15分、または静鉄バスで約20分

静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分、または静鉄バスで約3分

東名高速道路・静岡IC、清水ICから車で約25分

日本平久能山スマートICから車で約15分

新東名高速道路・新静岡ICから車で約25分

静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art



〒422-8002 静岡市駿河区谷田 53-2

ウェブサイト | <https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

お問合せ | 企画総務課 Tel. 054-263-5755 Fax. 054-263-5767 学芸課 Tel. 054-263-5857

申込方法など各イベントの詳細は当館ウェブサイトにてご確認ください。
情報保障(手話通訳等)を要する場合は、14日前までを目途にご連絡ください。

学芸員による連続講座

5月30日(土)、6月6日(土) 11:00-15:00(予定)

会場：当館講座室 途中休憩をはさみます *申込不要 先着30名まで
5人の担当学芸員がそれぞれのテーマについてお話しします。

時の蘇生・柿の木プロジェクト 植樹式&ワークショップ

4月29日(水・祝) *要申込

講師：楡木令子氏(アーティスト)

ワークショップと当館裏山での柿の木の植樹を実施します。

見えない人と見える人のおしゃべり鑑賞会

5月24日(日) 14:00-15:00頃 *要申込 要観覧券

視覚障害者と暗眼者がそれぞれの見方・感じ方を伝えあいながら作品を鑑賞します。

SPAC×静岡県美「ことばでひらく、アートの物語」(対話型鑑賞)

5月31日(日) 10:30-、13:30-(各回60分程度)

対象：小学生+保護者(各回5組) *要申込

プロムナードツアー バックヤードツアー

5月23日(土) 11:00-(バックヤード)/14:00-(プロムナード)

6月13日(土) 11:00-(プロムナード)/14:00-(バックヤード)

対象：小学生以上 *要申込(定員15名) 各回60分程度

美術館のプロムナードと、普段はお目につかない収蔵庫など美術館の裏側を
本展担当学芸員と探検します。

荒天の場合、プロムナードツアーはバックヤードツアーに変更となります。

静岡市美術館展覧会のご案内

「水木しげるの妖怪 百鬼夜行展～お化けたちはこうして生まれた～」

4月4日(土) - 6月14日(日)



表・裏面：伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》(部分) 18世紀後半

わたしたちは、静岡県立美術館開館40周年を応援しています

コアサポーター



サポーター

絵馬、額縁、人形も!

40歳に
なったゾウ

ゴーギャン、若冲から
大観、草間彌生まで

開館40周年記念展

静岡県立美術館を

Hiraku:

An Entrance to the Art
Seven Experiments
at the Shizuoka Prefectural
Museum of Art

ひらく 7つの扉

2026.4.25(土) - 6.21(日)

開館時間 | 10:00-17:30 (展示室への入室は17:00まで)

休館日 | 月曜日 ただし、5月4日(月・祝)は開館し、5月7日(木)休館。

観覧料 | 一般 1400円(1200円) 70歳以上 700円(600円) 大学生以下 無料

* ()内は前売及び30名以上の団体料金。 * ロダン館を併せてご覧いただけます。
* 身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、特定医療費(指定難病)受給者証・指定難病登録者証の
交付を受けている方と付添者1名は無料。 * 入場には事前予約は必要ありません。

主催 | 静岡県立美術館、静岡新聞社・静岡放送

〒422-8002 静岡市駿河区谷田 53-2 <https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

お問合せ | 企画総務課 Tel. 054-263-5755 Fax. 054-263-5767 学芸課 Tel. 054-263-5857

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

静岡県立美術館

は誕生してちょうど40年。「風景の美術館」をうたい、日本・西洋の風景画を中心に2900点を越えるコレクションを築くとともに、多彩な展覧会を重ねてきました。

開館40周年を記念するこの展覧会では、狩野探幽、伊藤若冲、ゴッゲン、川村清雄、横山大観、草間彌生など、コレクションから厳選した作品を手がかりに、美術の世界の広がりを探求する旅へとみなさんをお連れします。

7つの部屋が待っています。扉をひらけば、そこは展示室であるとともに実験室。絵の外側にまで目を向ける、絵の具の厚み=絵の高さに注目する、風景画とは何か、作者とは誰なのかを考えるなど、ふだんとはちょっと違う体験ができる部屋で、館長と5人の学芸員がお待ちしています。40年にわたるこれまでの歩みを振り返り、これからの美術館の姿を示します。



高力猿猴庵《北斎大画即書細図》1817年(25年転写)名古屋博物館蔵



木下館長

猿猴庵が案内する美術館以前の世界

猿猴庵は高力種信という尾張藩士。絵が得意で、名古屋城下のさまざまなイベントを記録しました。開帳、見世物、お祭り、そしてお寺の境内で北斎が120畳敷きの紙に大猿を描いたパフォーマンスまで。美術館がない時代、こうしたイベントにひとびとは熱狂しました。山口晃による再現映像も紹介。

第2室 絵画のかたち、油絵の居場所

絵ではなく、油絵の「かたち」をじっくりご覧になったことはありますか。油絵は額縁におさめるもの。そんな当たり前も明治以降、先人たちの努力によって築かれてきました。この部屋では、油絵には額縁というあたりまえを見つめ直します。



喜多学芸員



山本芳翠《猛虎一声》(額縁製作 長尾建吉) 1895年 東京藝術大学蔵

Hiraku: An Entrance to the Art Seven Experiments at the Shizuoka Prefectural Museum of Art

第1室 美術館とは何だろう



谷文晁《神馬図》1831年 浅草寺蔵

まずは第1問、絵馬は絵なのか馬なのか？ 生きた馬のかわりに、描いた馬を捧げたのが始まりだとすると、絵馬は絵である前に馬なのだといえそうですね。捧げる相手は神や仏でした。美術館は展示室から神仏を追い出し、絵馬を絵としてだけ眺める場になったのかもかもしれません。

第3室 風景をあつめる



貴家学芸員

人が眺めた世界のすがたを、持ち運べる板やキャンバスに描くことで風景画が生まれ、住居や公共空間を飾ってきました。神話や宗教の世界を描くのではなく、いわば人による人のための芸術である風景画をあつめることで、当館は、何をまもり、伝えようとしてきたのでしょうか。



ポール・ゴーギャン《家畜番の少女》1889年 当館蔵

第4室 絵画を立体的に見る



伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》(右隻部分) 三次元計測画像

画面全体に方眼を施す特異な描法で注目される若冲《樹花鳥獣図屏風》。実は、方眼一つ一つの絵具を厚く盛り上げたり、薄く盛り上げたりと立体的に描かれていることはあまり知られていません。最新デジタル技術を用い、その凹凸を視覚化することで、一体、どのような像が見えてくるのでしょうか。



薄田学芸員

第6室 美術家をめぐると物語



貴家学芸員

美術家とは、どのような人物なのでしょうか。作品のように個性的、あるいは気難しい性格でしょうか。美術家自身がメディアによく登場していたり、反対に姿が見えなかったりする場合もあります。ここでは、美術家の語られ方や、美術家と作品の関係に注目します。



草間彌生《最後の晩餐》1981年 当館蔵 ©YAYOI KUSAMA

第7室は、ロダン館と併せて収蔵品展覧料金にてご覧いただけます。料金の詳細は当館ウェブサイトにてご確認ください。



開館40周年を迎えた静岡県立美術館の成り立ちを、美術館アーカイブズから紹介します。美術館の活動やコレクション形成にまつわるあれこれを振り返り、静岡県立美術館のこれからを考えます。

《静岡県立美術館建築工事イメージ》1983年 当館蔵



古家学芸員

アーカイブ展示

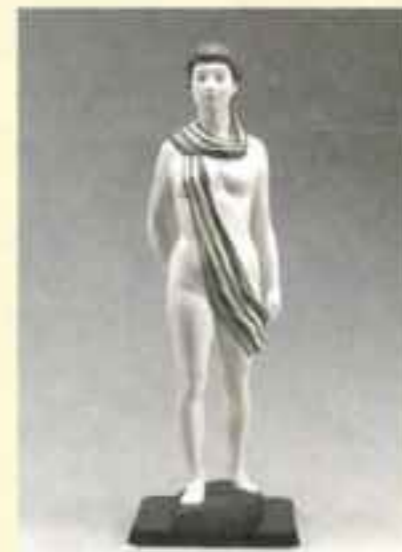
第5室 評価と名画

「名画」とは、多くの人を魅了してきた優れた絵画といえます。“優れた”の根底には学術的な評価が置かれていますが、そこでは何が評価され、また評価されなかった絵画は感動を与えることはないのでしょうか。当館が所蔵する富士図の名画から考えてみましょう。



横山大観《群青富士》(右隻部分) 1917-18年頃 当館蔵

第7室 人形と彫刻、ロダンへの道



平野富山《マフラーの女》1983年頃 静岡市(静岡市美術館管理)

人形は「ひとがた」ともいい、その字のとおり、人の姿をかたどったものです。大昔から、さまざまな理由で、人は人形を必要としてきました。神や仏の姿をつくる時にさえも。近代の彫刻家も、ひたすら人間像に取り組んできました。そのひとつの高みにロダンがいます。



木下館長